

聖書：ルツ記 3：1～18

説教題：あなたのおおいを広げて

日時：2015年5月24日

前の2章ではルツがナオミのために一生懸命働きました。それに対して3章ではナオミがルツのために行動を取ります。ナオミがルツのために考えていたこと、それはルツの再婚でした。ナオミは1章でも嫁のオルパとルツに、自分の国に帰って新しい人と結ばれて、新しい生活を始めるように強く勧めました。彼女は自分の幸せよりも、二人の嫁たちの幸せを優先して考える人でした。ここでもルツによって毎日食べ物が手に入ることを喜ぶだけではなく、こんなにも良くしてくれるルツのために何とかしてあげなくては！と思っていた。そこでついに口を切ります。1節：「しゅうとめナオミは彼女に言った。『娘よ。あなたがしあわせになるために、身の落ち着く所を私が捜してあげなければならないのではないのでしょうか。』」

そうしてナオミが提案した相手はボアズでした。ナオミにとっては、これまでの経過を見て来たなら願う成り行きは一つです。願わくはボアズが主導権を取ってくれば良いのですが、その気配がありません。良く言われるのは、ボアズはルツよりかなり年上の男性だったのだらうということです。そのため、ルツがいかに魅力的な女性でも、ボアズとしては「結婚」は現実的に考えられなかった。あるいはルツは夫を亡くした人であり、まだ喪の期間にあると考え、ボアズは自分からの接近は慎むべきと考えていたのでは、と想像する人もいます。あるいは買い戻しの規定に従って夫婦となる可能性が考えられるにしても、より優先されるべき親類が他にいたこともあったかもしれません。いずれにしろ、せつかく良いカップルになり得るのに、このままでは動かないことをナオミは見ていた。だから誰かが押してあげなければならない。そこでナオミはルツからプロポーズするようにと導いたのです。

それにしてもその提案は大胆でした。ボアズは今夜打ち場で大麦をふるい分けるから、あなたはからだを洗って、油を塗り、晴れ着をまとって打ち場の下って行きなさいと言います。確かにこの日は特別な日ですから、体をきれいにし、香水をつけ、いつもと違う格好をしてもおかしくはありません。問題はその次です。何とナオミは、ボアズが寝たのを見届けてから、彼が寝ている所へ入って行きなさい！と言います。そして彼の足のところをまくりなさい！そしてそこに寝なさい！一体これはどういうことでしょうか？ある人はこれはボアズを性的に誘惑しようとしたものだと見ます。理性を失いやすい状況で結婚を取りつけようとした不道德極まりない方法である、と。しかし注目すべきは、ルツが5節で「私におっしゃることはみないたします。」と言っていることです。もしナオミの提案に少しでも不純な要素が入っていたなら、どうし

てルツがこのように受け入れたでしょうか。またボアズも彼女の行動を破廉恥な方法とは解釈していません。10 節で「主があなたを祝福されますように。」と言い、「あなたはしっかりした人だ」とも誉めています。これはボアズが夜中に舞い上がって、不適切な発言をしたということでしょうか。そうではないでしょう。つまりこの行為は、確かにきわどい面がありつつも、不道德の要素が少しも混じっていないものとして受け入れられるものであったことを示しています。

ナオミの立場に立って考え直してみても、ここまで自分を大事にしてくれる嫁のルツに、遊女のような恥ずべき行ないをさせようと思うはずがありません。またボアズを罵にはめる仕方で結婚を成り立たせようとする黒い心も持っていません。むしろこの提案はボアズに対する深い信頼の上に成り立つものでした。4 節でナオミは「あなたの方はあなたのすべきことを教えてくれましょう。」と言っています。ナオミはボアズなら必ずこの状況を正しく導いてくれるだろうと確信しているのです。だから大事な嫁ルツを、彼以外の男性に対してなら危険とも思えるこの状況に送り出したのです。これは主の御心を仰ぎつつもボアズに対する深い信頼なしにはとてもできない提案だったのです。

さてルツは姑のアドバイスに従い、打ち場へと下って行きます。彼女はボアズが寝たのを見届けて、こっそりとそばに近づき、足のところをまくって寝ます。ボアズは、人の気配を感じてびっくりして起き上がり、「あなたは誰か。」と暗やみの中で問います。ルツはプロポーズします。9 節：「私はあなたのはしためルツです。あなたのおおいを広げて、このはしためをおおってください。」このルツのプロポーズは、続く言葉と切り離して考えることはできません。9 節後半に「あなたは買い戻しの権利のある親類ですから。」とあります。ここから分かることは、ルツは特にナオミのことを考えていたということです。

果たしてこのプロポーズはボアズに受け入れられるでしょうか。これは普通では考えられないプロポーズです。まずこれは女性から男性に向かってなされています。また若い者から年上の人に向かってなされています。また畑で働くはしためからその主人に向かってなされたものです。そしてこれは外国の女からイスラエル人に向かってなされたものでした。ボアズからの応答としてはいくつかの可能性が考えられます。一つは「どうして私がおまえなんかと結婚するだろうか」と拒否されることです。第一身分が違い過ぎる。国籍も違う。お前はもっと自分をわきまえた言動を取るべきではないかと叱責され、以後関係が悪くなる可能性があります。またこうしたアプローチは不道德だと解釈され、ふしだらな女と町中に言いふらされるかもしれません。あるいは性的に利用される可能性もあります。第一、他に誰もいない男性のところへ女性が夜に一人で出かけて行って、このように申し出たら何が起こるか、この時代が士

師記と同時代であることを思うなら、通常予想される答えは一つでしょう。

しかしボアズはナオミが信頼した通りの人物でした！いやそれ以上、と言っても良いかもしれません。ボアズは彼女に言います。10 節：「すると、ボアズは言った。『娘さん。主があなたを祝福されるように。あなたの後からの真実は、先の真実にまぎっています。』」「先の真実」とは、ルツが夫を失った後も姑と共に暮らし、このイスラエルにまでやって来たことを指します。それだけでも非常な賞賛に値します。しかし「あとからの真実」ははるかにまさる。ルツは結婚相手としてボアズ以外の人を選べたのです。自然の傾きに従って、もっと若い男たちの後を追うことができた。ここにボアズは必ずしも若くはなかったという暗示があります。しかし彼女は近親者ボアズを選びました。それは彼女がナオミの幸せを願ったからに他なりません。買い戻しの権利のある親類と結ばれることによって、エリメレクの家系を保ち、またその土地を守るからです。これはもちろん今日の私たちに、自分が望む結婚をしてはならないとか、自分を否定して家族の益を優先させるべきだと命じている箇所ではありません。仮に形だけそうしても、不平を言いながらそうしたのでは何の価値もありませんし、かえって悪い結果を生むでしょう。私たちがここに見るのは、ルツはこのことを進んでなしているということです。自分の益を優先して喜ぶのではなく、相手の益に仕えることを自分の喜びとして選び取っている。ボアズはそこにルツの賞賛すべき姿を見ているのです。プロポーズを受けて舞い上がるのではなく、見るべきところをきちんと見ている。ルツもルツですが、ボアズもボアズです。そしてこのような彼女を見て、ボアズのルツに対する心は一層燃やされたと言うのは真実でしょう。

ボアズはルツからのプロポーズを受け入れます。彼はこの結婚には色々なことが付いて来ることを知っていました。貧しさのために売却の必要に迫られているエリメレクの土地を買い戻すこと、その家系を残すこと、姑ナオミの扶養などなど。これはボアズ個人にはある意味で不利益をもたらすことかもしれません。4章6節ではその点を考慮して、他の人が買い戻しを辞退しています。しかしボアズは進んでこれを引き受けようとした。この買い戻しの制度は、律法全体がそうですが、神ご自身を映し出す制度です。9節の「買い戻しの権利のある親類」という言葉には印が付いていて、欄外を見るとヘブル語で「ゴエル」と書いてありますが、これは主なる神に対して使われており、「贖う方」とか「贖い主」と訳されています。ボアズはまことのゴエル、贖い主なる神を仰ぎ、感謝している者として、御心なら喜んで主を映し出すその役割を引き受けようとする心の持ち主だったのです。

しかしボアズは勇み足を踏まず、12～13節でこう言います。「ところで、確かに私は買い戻しの権利のある親類です。しかし、私よりももっと近い買い戻しの権利のある親類がおります。今晚はここで過ぎなさい。朝になって、もしその人があなたに親

類の役目を果たすなら、けっこうです。その人に親類の役目を果たさせなさい。しかし、もしその人があなたに親類の役目を果たすことを喜ばないなら、私があなただを買戻します。主は生きておられる。とにかく、朝までおやすみなさい。」こうしてボアズは事の成否を主の御手にお返ししたのです。主の御心に従うことを第一に大切なこととし、そのためにはなお時間をかけることについてルツの同意を求めたのです。そしてそれまでは、このムードの中でも彼女に触れることなく、道徳的な清さを保った。何かが起こってもおかしくない打ち場における男女の一夜。しかしそこには何と主を中心としつつ、互いへの思いやりに満ちた会話が交わされたことでしょうか。

次の日、ルツを帰す時、ボアズは大麥六杯を持たせます。一つには朝早く畑から出て行くルツへの誤解を防ぐため、そしてもう一つにはナオミへのお土産という意味がありました。ナオミはルツから一部始終を聞くと共に、この大麥六杯を見て、どんなに主の奇しい導きをそこに認めたことでしょうか。彼女は最後、ルツにこう言います。「娘よ。このことがどうおさまるかわかるまで待っていなさい。あの方は、きょう、そのことを決めてしまわなければ、落ち着かないでしょうから。」このように引き続きボアズに信頼し、またすべての上に御手を置いている主に信頼して、最善の導きを待つばかりの二人が描かれてルツ記3章は閉じることとなります。

この章では登場人物たちの大胆な行動が目立っています。ナオミの大胆なアドバイス、それに従ったルツの大胆な行動、そしてボアズの応答。ここに主の摂理を信じるとは、私たちが何もしないでただ待つこととイコールではないことを見ます。しかし私たちが取り違えないようにすべきは、彼らは自分勝手な願望で動いたのではないことです。そうではなく、困難の中でも主を信じて御前に誠実に歩んだ彼らに、主が与えて下さった導きを見出して彼らは従ったのです。ナオミは人間的な思いでルツとボアズの結婚を仕組んだのではなく、そこに主の導きを認め、あるいは求めて動いたのです。そして彼らは主の御心に従うことを第一に大切なこととしながら、主が下さる導きを待ち望んだのです。これは私たちが困難にある時、大きな慰めではないでしょうか。たとえ望みがないような状況でも、主こそ主権を持っておられる方と仰ぎ、御前に誠実に歩むなら、主はこのようなチャンスを下さるのです。道を切り開いて、これだよと示して下さる導きがあるのです。

そしてこれと合わせて考えるべきは、このルツ記3章の特徴は、3人の登場人物が皆、互いのために行動していることです。ナオミは嫁ルツの幸せのために心を砕きました。ルツも姑のナオミの益を願ってひらすら自らをささげています。またボアズも主の導きと確信してルツとナオミのために自分自身をささげようとしています。これがこのルツ記の美しさの所以でしょう。もし主の摂理を信じると言いつつ、それぞれが自己中心的な祝福を手に入れるために忙しく振る舞っていたら、読む私たちはウンザリす

るでしょう。何のための主の摂理か、自分勝手な野望実現のために主を都合よく利用しているだけではないか、と思うでしょう。しかし今日の 3 人は主の摂理を信じ、互いのために仕えています。そしてそういう者たちを主は確かに祝福しないではおられないのです。

私たちも、主こそ奇しい御手を持つ主であることを仰ぎたいと思います。目の前の色々なことに心乱すのではなく、この主権者に信頼して従うなら、この方が私たちの理解を超える良い導きを与えて下さる。その主を仰いで憩う時、私たちは自分のことばかりでなく、他者のためにも生きるようにと導かれるでしょう。なぜなら、主に喜ばれる生活は、「神を愛する」と共に「隣人を愛する」生き方でもあるからです。ナオミとルツとボアズは特別に設定された状況においてではなく、ごく身近な自分たちの日常生活の中で他者に仕えました。私たちも日々の歩みの中で、主を信じるゆえに自分のことだけでなく他者をも顧みて仕えて歩むことができる幸い、又その歩みを通してさらに主からの豊かな祝福にともにあずかる歩みへ進みたいと思います。